

「海洋知の再編と日本社会」の新展開

Newsletter

VOL. 1

2020.9

*第1回会議の記録

- ・「趣旨説明」（杉本史子）…………… p. 2
- ・「海洋知の再編と日本社会」2019年度の活動と成果（菊地智博）…………… p. 6
- ・コメント（橋本敬之）…………… p. 13
- ・島谷市左衛門の『無人嶋之絵図』と近世期前半の太平洋探検（ヨナス・ルエグ）…………… p. 14

- ・コメント（鈴木純子）…………… p. 15
- ・討論記録…………… p. 16
- ・関連豆知識…………… p. 17
- *活動記録…………… p. 19
- *今後のお知らせ…………… p. 19



ニューズレター発刊にあたって

本プロジェクトは、2019年度海洋教育基盤研究プロジェクト（海洋学）「海洋知の再編と日本社会」の史料調査の成果をうけ、本年度、「海の政治史から、陸上の社会を捉え直す」をテーマに、①史料情報の研究資源化を図りつつ、②海洋を視野に入れて近世から近代の日本社会を見直すことを目指し、さまざまな角度からオンライン研究会を行っていく。その成果は、ウェブサイト (<https://www.hi.u-tokyo.ac.jp/personal/fumiko/index.htm>) および本ニューズレターを通じて発信していきたいと考えている。

（杉本史子）

第1回会議の記録

◆開催日時

2020年8月18日（火） 15時～17時

◆場所・開催方法

オンライン（Zoom）

◆参加人数

9名

◆会議次第

1. 活動の趣旨（杉本史子）
2. 自己紹介
3. 研究報告
 - ① 「海洋知の再編と日本社会」2019年度の活動と成果（菊地智博）
コメント（橋本敬之）
質疑応答
 - ② 島谷市左衛門の『無人嶋絵図』と近世期前半の太平洋探検（ヨナス・ルエグ）
コメント（鈴木純子）
質疑応答

趣旨説明

杉本 史子（東京大学史料編纂所）

1. プロジェクト趣旨—海の政治史から、陸上の社会を捉え直す—

本プロジェクトでは、従来の研究史では、必ずしも十分に検討されてこなかった海の政治史—近世権力による海洋管轄・運営の問題—の検討から、陸上の社会の捉え直すことを目指していききたい。

2019年度「海洋知の再編と日本社会」では、19世紀における「新たな海洋」の登場、そして、世界レベル・日本レベルでの「海洋知の再編」に注目してきた（次掲レジュメ第2章）。

19世紀、日本において西欧式の新たな海洋知の獲得を目指す主体たちの語りにおいては、往々にして、それ以前の近世日本の人々の海洋との関わり方は、稚拙な、遅れたものとして言及される。しかし、はたして、近世の社会と海洋の実態はどのようなものだったのか、本プロジェクトの関心の軸のひとつはそこに置かれている（次掲レジュメ第1章）。

この課題に取り組むにあたって、スタートラインでのパースペクティブとして参照しておきたいのは、1700-1800年代の東アジアを「海商と「近世国家」の“すみわけ”」とみる、羽田正編『東アジア海域に漕ぎ出す！ 海から見た歴史』（東京大学出版会、2013）の提示する次のような視角である。

①「近世国家」（日本・朝鮮・琉球・清）の海洋との関わり方は、陸上の政治権力自身が海軍を整備し海上に乗り出すのではなく、強力な陸上軍事力によって沿岸をかため海上勢力が足がかりをつくる余地をなくしてしまうというものだった。②日・朝・琉は自国民の海外渡航を禁止し、東・南シナ海は、ムスリム商船と日本船が撤退し、華人海商がいきかう海となった。18世紀後半にはヨーロッパ商船が主役になった。③そして、近代では、国家の海洋へのかかわり方は、外洋海軍を基幹とした「面としての海洋（＝領海）の管理」へ移行する。

このようなパースペクティブを視野に入れた時、「日本」における、沿岸航路の成立や、水路（川海、堀川）ネットワークはどのような相貌をみせてくれるだろうか。

本プロジェクトでは、以上の観点から、海川の管理論、海洋観、領土と領海の問い直しなどの諸課題を検証していくことを企図している。

以下、当日のレジュメの概要と引用文献を掲載する。

本年度の趣旨説明

杉本史子

はじめに

1 近世成立期の海洋情報は、「鎖国」・海禁下で失われたのか

1-A 近世成立期の海洋状況—世界的規模での交流の深化¹、「倭寇的状况」²。

中世行基図とは異なる、羅針盤を用いたポルトラノ海図に基づく格段に精緻な日本図の登場。

1-B 17世紀以降、海の勢力は抑え込まれ、渡海技術は失われた、という見方

1-C 1700-1800：海商と「近世国家」の“すみわけ”という見方³⇒その状況下での「日本」をとりまく沿岸航路、河川－海洋ネットワークの形成⁴

<本プロジェクトでは、1-Cを念頭に置き、1-Bについて問い直しを行いたい。その際以下の指摘に注目する>

①「鎖国が脆弱・低性能な和船を造った」という言説の相対化⁵

②1-Aの海洋情報のゆくえを探る

○商人世界と、支配・軍事

- ・守護大名・戦国大名の支配を凌駕する、商人の活動範囲。秀吉の「日のもと」の範囲は、商人の営業範囲に依拠か⁶。⇒近世を通じて存在した密輸 海商とリンクは？⁷
- ・19世紀、海運+海軍という発想
享和2（1802）箱館奉行の意見に、幕府手船は商船+軍船に使用という見解あり⁸。
嘉永6（1853）竹川竹斎が幕閣に提出した『護国論』では、戦国時代海賊衆や倭寇という海上勢力を念頭に、海運と一体化した海軍の整備・維持を提唱⁹。

○海の把握

- ・安永7（1779）長久保赤水『改正日本輿地路程全図』では、緯度は、ポルトラノ海図など既存の資料を利用したもの¹⁰
- ・寛政11（1799）年堀田仁助弟子の江戸～蝦夷の針路図（菊地報告）の描写
※1799天文方堀田仁助の海上測量 磁石だけを頼りとする航海ではなく、天文航法による大洋航海のために、天文方派遣を求めた

2 19世紀という時代—「新しい海洋」の登場

<「新しい海洋」の登場とは>

- ・経緯度という共通座標計測の実用化
⇒ 近代的海図を通じた、国際的な情報共有・情報競合の場としての海洋¹¹
- ・沿岸海域観念—領海観念の変化：19世紀には、国家領域論（英米系）と、特定目的の機能的管轄権（大陸系）が対立していた¹²
- ・「船艦」 帆船と汽船の機能を具備 迅速、航路の成立—定期航路という発想、夜間航行可能¹³

2-A 「接続される海」¹⁴2-B 「外洋海軍を基幹とした「面としての海洋（=領海）の管理」へ¹⁵
航路図から近代的海図へ¹⁶2-C アジアにおいては、近代の国土は「新しい海洋」のなかで形成された¹⁷

国民国家論の基礎をなすトンチャイ・ウイニチャクンの「ジオ・ボディ」論：明確な国境と均質な国土。排他的な空間（近代的領域主権）による「他者の創出」

⇒アジアでは、「新しい海洋」の登場のなかで、近代的国家形成（その典型としての日本）—海洋観と国土観は相互に影響

- ・離島をも含む国土の発見 海図から「疑存島」が淘汰されていく¹⁸
- ・「近代的海図」の作成を尖兵として、「海外」に触手を伸ばしていく—一面的な海洋把握を視野に入れた動態的な国土観
- ・（近世から近代への移行とは、国民国家論が描いたような、均質な国土空間と明確な国境というよりは）不均質な空間から別の階層をもった空間への移動¹⁹。

註)

1. 岸本美緒 「『近世化』論と清朝」(『別冊 環』16、2009)
2. 村井章介 『世界史のなかの戦国日本』(筑摩書房、2012) p.35
3. 羽田正編 『東アジア海域に漕ぎ出す I 海から見た歴史』(東京大学出版会、2013)
4. 渡辺信夫 『渡辺信夫歴史論集 2』(清文堂、2002)
5. 安達裕之 『異様の船』(平凡社、1995) 第一章「鎖国令と造船制限令」
6. 村井章介 『日本中世境界史論』(岩波書店、2013) pp.74 ~ 82
7. 杉本史子 「18世紀、秀吉への謀反を演じるということ—並木正三「三千世界商往来」(藤田達生編『近世成立期の大規模戦争 戦場論 下』岩田書院、2006) p.341、真栄平房昭「幕藩制下における唐物抜荷と琉球」(藤野保先生還暦記念会『近世日本の社会と流通』雄山閣、1993)
8. 前掲、安達(註5) p.142
9. 金澤裕之 『幕府海軍の滅亡』(慶應義塾大学出版会、2017)、第一章。竹斎は、三井と並び称される、伊勢国商人。
10. 織田武雄 『地図の歴史 日本篇』(講談社現代新書、1974) pp.79 ~ 80
11. 杉本史子『近世政治空間論』(東京大学出版会、2018)、同「海洋空間と情報の幕末史—海図と船艦の19世紀」(『都市史研究』第6号、2019年11月、pp.91 ~ 100、同「海洋知の再編と日本社会」ノート—史料と研究視角」(『東京大学史料編纂所研究紀要』30号、2020年3月) pp.81 ~ 96
12. 西本健太郎 「海洋管轄権の歴史的展開」(『国家学会雑誌』125-5・6 ~ 126-3・4、2012 - 2013)
13. 前掲、金澤(註9)
14. 後藤敦史 「接続される海—幕末の九州、瀬戸内海、日本」(マシュー・オーガスティン『明治維新を問い直す』九州大学出版会、2020)
15. 前掲、羽田編(註3)
16. 前掲、杉本論文(註11)
17. 杉本史子 「近代国家形成過程再考—新しい海洋の登場とジオ・ボディ」(ダニエル・V・ボツマン、塚田孝・吉田伸之編『「明治一五〇年」で考える—近代移行期の社会と空間』(山川出版社、2018) PP.135 ~ 150、Sugimoto, Fumiko. "Political Cartography during the Tokugawa Era." In the Oxford Research Encyclopedia of Asian History. Ed. David Ludden. New York: Oxford University Press (<http://asianhistory.oxfordre.com/>、2020)
18. 長谷川亮一 『地図から消えた島々』(吉川弘文館、2011)
19. 杉本史子 『近世政治空間論』(東京大学出版会、2018) p.366

「海洋知の再編と日本社会」2019年度の活動と成果

菊地 智博（東京大学大学院大学院）

1. 視点と方法

19世紀、経度測量の容易化や蒸気船の出現、正確な海図の普及によって世界的に「新たな海洋」が出現した。この経験知的な海洋把握から客観的な世界像への転換、すなわち「海洋知の再編」は、近世後期～幕末期の欧米諸国の接近に伴って日本へ波及した。

かかる視点のもと、本研究では2つの画期に着目した。第一に洋学の受容が進む一方でロシアの接近により海防論が興隆しつつあった18世紀末～19世紀初頭。第二に、列強の接近により「海防」が現実的な政治課題となった天保期以降の幕末期である。

2. 活動の内容

活動方針として、史料が保管されている現地に赴き、史料の実見と撮影を組み合わせる調査を行った。これにより現地の環境も加味しつつ、現物からのみ判明する情報を得ることが可能となる。

2-1. 堀田仁助筆写絵図の調査

- ・2019.08.27～28 島根県津和野町・太鼓谷稻成神社調査

第一の画期について、伊能忠敬に先立って蝦夷地までの実測地図を製作した堀田仁助の作成した絵図の調査を行った。彼の事績は伊能に比して注目されておらず、検討の余地が残されている。

2019年度には太鼓谷稻成神社に残された、堀田による伊能図の写などを調査した。

2-2. 江川文庫所蔵海防・島嶼関係史料調査

- ・2019.12.03～04 静岡県菰山・江川文庫調査（第1次）
- ・2020.02.05～06 静岡県菰山・江川文庫調査（第2次）

第二の画期において、幕府代官として島嶼部を含む行政を担当し、かつ幕末期の海防実務に関わった代官江川氏に着目した。江川氏は伊豆・関東の幕領の代官を世襲し、19世紀以後支配所の海防にも携わった。特に幕末期の英龍は幕府への海防建議、砲術伝授や品川台場の建設などで高名である。

2019年度は江川家文書を所蔵する財団法人江川文庫において、海防関係・島嶼行政関係などの史料を調査・撮影した（159点・1325コマ。既撮影画像の提供を含む）。



太鼓谷稲成神社

3. 津和野町・太鼓谷稲成神社調査の成果

本調査については、菊地智博ほか「江戸幕府天文方堀田仁助関係絵図調査記録」に詳述しているため、以下略述する¹。

3-1. 堀田仁助について

堀田仁助は津和野藩士で、江戸において幕府天文方渋川主水に師事し天文学を学んだ。寛政11年（1799）に東蝦夷地を直轄化した幕府は航路啓開のため堀田仁助に蝦夷地への航海を命じ、堀田は品川からアッケシへ赴く途上で関東・東北・蝦夷地沿岸を海上から測量した。これは日本初の西洋式実測図とされ、幕府へ提出された成果図の控が津和野町郷土資料館に所蔵されている²。ところがその翌年に幕府は伊能忠敬に陸上からの測量を命じ、その後の全国測量へつながる。堀田は文政9年（1826）に津和野へ戻るが、その際に津和野藩主に献上した2点の伊能図写が太鼓谷稲成神社に伝来している。

2019年度の調査では神社所蔵の2図および津和野町郷土館所蔵の図を実見した。

3-2. 太鼓谷本『日本国地理測量之図』・『東三十三国沿海測量之図』の特徴

太鼓谷稲成神社には、文政7年（1724）頃の堀田による伊能図写図である『日本国地理測量之図』・

『東三十三国沿海測量之図』が所蔵されている（以下「太鼓谷本」）³。本図を伊能図の一バリエーションとしてのみならず、堀田の成果として位置づけて分析することが本調査の眼目である。

両図はともに手書彩色図であり、前者は日本列島全体、後者は東日本のみを描く。その周辺に測量データなどが囲み記事として配置されている。国立公文書館所蔵の同じ組み合わせの伊能図（「国立本」）と比較すると、次のような特徴がある。

- ①『東三十三国～』国立本は東蝦夷地を襟裳岬まで描くが、太鼓谷本は納沙布岬まで
- ②周囲の囲み記事において、太鼓谷本『日本国～』は国立本に比べ蝦夷地のデータが多く補われている
- ③太鼓谷本『日本国～』は国立本に比べ、海洋や島嶼を強調して記載する

以上のように、太鼓谷本ではより強い蝦夷地や海洋・島嶼への関心が見て取れる。

3-3. 津和野町郷土館所蔵『従江都至東海蝦夷針路之図』の特徴

本図は前述の通り寛政11年の海上測量成果の手元控えとされる⁴。2019年度は予備調査として、津和野町郷土館の展示を目視調査した。

実測によって描かれた海岸線は、岩礁か砂地かなど、状況によって塗り分けられている。描写範囲は本来品川～蝦夷地までと考えられるが、品川付近は現在欠損しており、また陸奥国の一部は雲で海岸線を隠した記載となっている。海上には4つのコンパスローズが配置されているが、堀田の航跡から考えて実測点とは考えられない。また、図面余白の記事には品川からアツケシまでの里程や緯度など、堀田が測量行で得たデータが記されている。

4. 静岡県韮山・江川文庫調査の成果

4-1. 江川代官について

江川氏は韮山に拠点を置いた武士で、近世には伊豆・関東などの代官を世襲した⁵。江川氏累代の文書を所蔵する江川文庫には、代官としての行政上の書類を留めた「御用留」が数百冊以上残り、また本研究課題に関わっては、近世後期以降の境界領域の一つとなる伊豆諸島など島嶼部に関する史料が残されている点が特筆できる。

幕末期には海岸部を管轄する関係上、代官も海防の一端に参与する。特に有名な江川英龍（任天保6～安政2年）は就任時より海防に関心を寄せ、幕府へ多数の海防建議書を提出している。彼は代官の立場を超え西洋砲術の普及や台場築造、洋式船建造など幕府の海防にも積極的に関与しており、日本における「海洋知の再編」の当事者であったといえよう。

以下では、2019年度の2回の現地調査において対象とした史料の例を紹介する。

4-2. 江川の海防建議書について

（本項については後日別途報告予定のため、略述する）



江川文庫が所在する江川邸

江川英龍は天保8年以降、33通の海防建議書を幕府に対して提出したことが知られている。英龍の海防論を示すとともに、その内容の多くが幕府によって後に実現された点で重要な史料といえる。

先行研究においては次々代・英武が編纂した史料に依拠するが、江川文庫には多くの海防建議書原本・下書が残されており（例えば、Q3-32「伊豆国御備場之儀二付存寄申上候書付」）、その内容から江川の海防論の形成・変遷が明らかになる可能性がある。

4-3. 江川と伊豆海防

江川代官によって行われた具体的な海防の様相について、江川文庫には、葎山塾・鉄砲方関係（天保年間～）、品川・江戸湾口台場関係（弘化～安政年間）、造船・鑄砲関係（安政～慶応年間）のような史料が残る。伊豆半島・伊豆諸島に関しては、以下のような史料が残る。

4-3-1. 台場関係史料

伊豆半島には文化年間以降、下田に台場が設けられ、また沼津藩の動員体制が定められた。天保年間以後、半島各地には新たな台場が設けられるが⁶、小田原藩においても同時期に城下へ台場を新設する動きがあり、英龍やその門下が技術指導にあっている⁷。

江川家文書中に残る関連史料としては 31-2-11-7-1「(小田原海岸図)」があり、嘉永3年頃に

おける台場の配置などが記されているほか、試射時の射表などが残されている。

4-3-2. 農兵関係

農兵は文字通り百姓層の者を徴募し戦力化するもので、江川は建議書において度々進言していた。農兵は文久3年（1863）以降関東幕領において実現し、上層百姓の子弟らがゲベール銃を貸与されて訓練を受けた⁸。

農兵関係では N59-62「銅錫鋼鉛其外有高（農兵火薬・鉛など部門別武器物資覚書）」が着目できる。慶応元年～3年末（1865～67）にかけて代官所で保管されていた銃砲原料金属や火薬類の貯蔵量について、科目を分けて数量を記載している。多くは火薬や雷管・ハترون（弾薬包）に関するもので、使用量・補充量を詳細に記している。度々伊豆各地の農兵訓練用に支給されたことがわかり、頻度や規模が類推できる。また江戸表（芝新銭座大小砲習練場⁹か）からの火薬補充の様相も明らかとなる。

4-3-3. 伊豆諸島防衛関係

伊豆諸島防衛関係の史料も複数確認できるが、中でも興味深いものとして N40-1130-1・2「以書付奉申上候（新島村・岡田村など6か村の鉄砲・銃・木砲配備の届）」がある。

本史料は天保10年（1839）の江川来島時に地役人から提出されたものと思われる。伊豆大島における沿岸各村々の武器配備数、鉄砲打の数や人員配置を書き上げ、非常時の動員体制を示すものである。この体制は文政年間に当時の代官田口五郎左衛門によって整えられたもので¹⁰、天保11年に伊豆諸島が江川の支配所となると、その再確認と強化が図られてゆく。

4-4. 江川と幕領の支配——御用留類の分析にむけて

第2次調査では、以上のような海防関係史料に加え、2020年度への展開も見据え、民政担当者としての葦山代官分析のため、基本史料である御用留類の基礎的な調査を実施した。

江川文庫の御用留は執務上の書類を記録した簿冊であり、葦山代官所や江戸役所において記録された18世紀後半～明治期にかけての数百冊が残るが、その膨大さゆえ全体的な分析には至っていない。

「伊豆葦山江川家文書データベース」¹¹から『御用留』を抽出し、分類した結果が次ページの表である。主要なシリーズである『御用留』『公事方御用留』に加え、案件別に個別の『御用留』が作成されていた。『御用留』とのみ表紙に記された一群については明和6年以降ほぼ毎年分が残っており、民政全般の事項について、勘定所等との往復書類等が記録されている¹²。『公事方御用留』については、支配所の公事（訴訟）関係の書類が記録され、起訴から判決に至る過程が詳しく判明する¹³。

2019年度においては、内容分析に先立ち簿冊の形成過程を検討した。『御用留』については後に再編綴された可能性があり、検証が必要であった。表紙の紙背や古いとじ穴・虫食いの連続性などを確認した結果、以下のような点が明らかとなった。

表1 江川家文書『御用留』類の分類

区分	分類	点数	年代	備考
	『御用留』	108点	明和6年(1769)～慶応4年(1868)	
	『公事方御用留』	40点	寛政11年(1799)～明治5年(1872)	明治の『刑法御用留』4点含
入用記録	『上洛御用留』	7点	文久2年(1862)～慶応4年(1868)	長州戦争関係等
	『参府御用留』	24点	天明5年(1785)～明治4年(1871)	
海防関係	『御備場御用留』	7点	天保9年(1838)～慶応3年(1867)	
	『高島流御用留』	3点	天保12年(1841)～慶応3年(1867)	
	鉄砲方・講武所関係	6点	天保14年(1843)～慶応3年(1867)	
	反射炉・铸砲関係	6点	嘉永6年(1853)～明治6年(1873)	
	造船関係	5点	安政元年(1854)～慶応3年(1867)	
	その他砲術・海防関係	11点	天明4年(1784)～慶応元年(1865)	
民政関係	『島方御用留』	5点	安永4年(1775)～寛政4年(1792)	
	漂着船関係	10点	文化4年(1807)～嘉永5年(1852)	
	御用米・年貢回送関係	8点	寛政8年(1796)～明治元年(1868)	
	御林・天城炭関係	15点	寛政5年(1793)～明治6年(1873)	
	河川等普請関係	9点	天明7年(1787)～天保6年(1835)	
	講・貸付金関係	5点	文化3年(1806)～明治5年(1872)	
家政・家督関係		10点	寛政4年(1792)～大正2年(1913)	
近代葦山県・足柄県関係		46点	明治元年(1868)～明治9年(1876)	
その他・断簡		68点		

- ①多くの『御用留』の表紙には共通の年代・性格を持つ紙背文書が確認でき、後年に同じタイミングで表紙が新しく付されたことがわかる。
- ②多くの『御用留』において、全丁にわたって共通する古いとじ穴の存在が認められ、現在の秩序が成立した後に綴じ直しが行われたことがわかる。また上部に裁断跡の残る簿冊が複数あり、綴じ直しの後に裁断が行われた可能性がある。
- ③案件別『御用留』が通常『御用留』から分冊された可能性について、『島方御用留』と同年『御用留』を比較したところ、虫食い穴の不一致や内容から、必要な文書を謄写して『島方御用留』が形成されたと考えられる。

以上のように、現在残る『御用留』の多く(少なくとも一部)は後年(明治期)に手の加えられたものである可能性が高く、その点に留意して今後の検討をすすめる必要がある。

5. 2019年度の成果と2020年度への展望

■現地調査を3回実施

- ・2019.08.27-28 島根県津和野・太鼓谷稻成神社調査
- ・2019.12.03-04 静岡県葦山・江川文庫調査(第1次)
- ・2020.02.05-06 静岡県葦山・江川文庫調査(第2次)

計163点の史料を調査、約1500コマの画像を撮影

■1回の研究会を実施

- ・2019.09.27-28 「城・都市と危機」研究会・国際歴史文化研究会合同研究会および小田原城

現地踏査（内容は後掲報告書を参照）

■成果論文

- ①杉本史子「海洋知の再編と日本社会」ノート 一史料と研究視角」（『東京大学史料編纂所研究紀要』30号、2020年3月）
- ②菊地智博・杉本史子・佐藤賢一・瀬戸裕介「江戸幕府天文方堀田仁助関係史料調査報告」（『東京大学史料編纂所画像史料解析センター通信』89号、2020年4月）

■報告書

『東京大学史料編纂所研究成果報告 2019-2 変動期の政治社会と海洋知』2020年3月

2020年度に向けては、次のような展開を検討している。

- ①堀田仁助について、関係資料の調査
- ②江川代官について、さらなる研究領域の展開
 - (1) 河川舟運と海運の直結性（杉本趣旨説明参照）に関連し、代官の河川・通船行政と海洋の支配の関連性について
 - (2) 寛政～文政期（1789～1829）における海防と代官の関わり
 - (3) 『御用留』・海防建議書の形成過程分析の深化

註)

1. 菊地智博・杉本史子・佐藤賢一・瀬戸裕介「江戸幕府天文方堀田仁助関係絵図調査記録」（『東京大学史料編纂所画像史料解析センター通信』89号、2020年）
2. 神英雄「地理学者堀田仁助と西洋式地図」（『島根地理学会誌』50号、2017年）
3. 渡辺一郎「太鼓谷稲成神社（津和野）蔵 日本地理測量之図」（『季刊 伊能忠敬研究』8号、1996年）および『伊能図大全』第六巻（河出書房新社、2013年）所収の渡辺一郎「伊能図の発見史」・鈴木純子「伊能図の内容と構成」を参照
4. 余白記事の記載によれば門人木村一綱による寛政11年11月付の写である
5. 以下、仲田正之『葦山代官江川氏の研究』（吉川弘文館、1998年）および葦山町史編纂委員会編『葦山町史 第十一巻 通史Ⅱ近世』（葦山町史刊行委員会、1996年）による
6. 以上、浅川道夫「沼津藩の海防と伊豆東岸の台場」（『開国史研究』11号、2011年）・同「下田港の台場について」（『開国史研究』12号、2012年）
7. 『小田原市史 別編城郭』（小田原市、1995年）
8. 樋口雄彦『幕末の農兵』（現代書館、2017年）
9. 仲田正之「江川英龍の事績と安政改革」（前掲『葦山代官江川氏の研究』）を参照
10. 立木猛治『伊豆大島志考』（伊豆大島志考刊行会、1961年）
11. http://base5.nijl.ac.jp/~archicol/egawa_DB_index.htm
12. 仲田正之「後期葦山代官」（前掲『葦山代官江川氏の研究』）
13. 仲田正之「近世代官の支配機構と代官江川氏の機構」・「近世後期代官の公事手続き」（同『近世後期代官江川氏の研究』吉川弘文館、2005年）

菊地報告コメント要旨

橋本 敬之 (公益財団法人江川文庫)
記録・要約＝菊地 智博

■海防建議書について

江川文庫に海防建議書はたくさん存在しており、『建議書抜粋』について、それぞれ原文書がどこに存在し、保管されているのかについて確認したいと思っていたところで、成果を出していただいた。これから私のほうでも成果をだしていきたい。

海防建議書については、年代が確定できないものも多い。書かれた順序を明確にしてゆき、どういう状況に日本が置かれ、それをどう整理して海防建議書に結びつけていったのか、というところを確認できるとよい。

海洋知、という話に関連してヨーロッパの文化・情報を日本に取り入れるという面からは、江川が渡辺崋山に執筆を依頼した『外国事情書』がある。何度か書き直しをしているが、江川文庫にはたくさんの『外国事情書』が残っている。世界地図などが一括して残っており、確認を進めていきたい。

■御用留類や難船の記録について

御用留類のなかでも、勘定方への伺書には、(2020年度に向けた課題として挙げた)川の普請の様子や、さらに難破船の記録がたくさんある。

伊豆半島は江戸に向かう航路の途中で難破船が多く発生するため、地方にも難船の記録が残されているが、地元の史料では年号がわからない。干支のないような報告書もたくさん残っている。ところが、江川文庫の中の勘定所への伺書を分析すると、どこの船がどういう荷物を積んで、どこで難破し、どこに入津して、その荷物がどうなったのか、ということを確認することができる。ここから、海上交通や海運のことについて詳細なデータが取れるのではないかと考えている。

また、(2020年度に確認したい史料として)「下田湊滞船書上帳」を挙げられていたが、このような類の史料はまだ一冊しかない。本当はこの入津記録がもっとたくさんあるのではないかと考えているので、今後目録を調査していただけるとありがたい。

島谷市左衛門の『無人嶋之絵図』と近世期前半の太平洋探検

ヨナス・ルエグ（ハーバード大学）

報告者は博士論文で19世紀の太平洋における環境変遷と、それが引き起こした海洋をめぐる地政学的競争の長期的展望を分析しようとしている。そのため、陸上の帝国拡張の分析に利用されてきたコンセプト「フロンティア」を、海洋環境の分析に活用している。19世紀の政治的改革や帝国拡張の始まりには、「流れる境界区域」への進出はどのような影響を与えたか、また、海洋環境からの資源採取などがどのように列島の資源ベースを変えたか、などという問いかけを「黒潮フロンティア」を介して理解するべきだと論じている。

本発表では、フロンティア探検の開始、17世紀後半に行われた小笠原諸島の探検を俎上に載せた。島谷市左衛門という探検家が描いた地図、またその写しと思われる『無人嶋之絵図』（下図）を読みながら、その時代の地理的概念や地図学の慣習をもって当時の太平洋観をうかがうことができる。この地図は国内外で何回か再利用された。その情報が18～19世紀の無人島（小笠原諸島）開拓論に及ぼした影響を分析した。

林子平の「三國通覧図説」（1785年）や1843年のフランス語訳を筆頭に、市左衛門の地図の復刻は世界で受容されて、最終的にペリー提督が参照するまでになったようである。本発表の対象となった地図（個人蔵）が作成された背景は不明であるが、近世日本の「無人島」に対する意識の証拠として貴重な史料である。



島谷市左衛門『無人嶋之絵図』年代不明（1675年以降）、個人蔵

ヨナス・ルエグ報告コメント要旨

鈴木 純子 (元・国立国会図書館)
記録・要約=菊地 智博

地図を成立させる基礎として、ひとつは陸地の記述、もうひとつは sea centric—つまり海を主体として描く、という二通りの形式があるという考え方に注目。海を描くことによって海洋の場所としての意味が可視化され（「資源や空間をめぐる国際的な競争の舞台」）、陸・海岸はその構成要素として表現される。一方、陸地を記述する伊能図は陸から海へ指向し、フロンティアとして海を描く。

「黒潮フロンティア」：金銀島、無人嶋、小笠原周辺の探査と情報の錯綜は興味深い。

1. 「無人嶋之絵図」(n.d.)の成立

全般に、1675（寛文5年）嶋谷市左衛門調査についての通念や、本絵図に対する一般的な認識はあまりに概括的で、実態に即さない。

- * 嶋谷市左衛門3代（秋岡1963、山田2016など）— 市左衛門は一人ではなく、3代にわたる。
 - ・ 嶋谷市左衛門見立（1690没）— 東南アジアなどへの航海経験をもつ
 - ・ 市左衛門尉（禧里？ 1691没）— 小笠原探査を行う（※尉（じょう）は尊称）
 - ・ 市左衛門貞重（1714没）— 『按針之法』を著す。兄・太郎左衛門は小笠原に同道
- * 航海に使われた「唐船造之船」（富国寿丸）の建造
 - ・ 船は探検用として新調されたものではない。長崎代官を通じ見立が建造→1670に江戸回航
 - ・ 幕府の沖乗を含む海運構想の一環として作られたものか？
- * 探検計画の機縁になったミカン船漂流（1670生還）のタイミングは絶妙であった？
 - ・ 航洋技術をもつ嶋谷市左衛門という人材起用が可能だった（⇔航洋技術衰退の時期）+ 唐船の存在
- * 寛文・延宝期、幕藩体制の整備が進む中で、国土の地理的把握活動へ
 - 寛文五枚図（北條氏長：万治年間測量図、オランダ流＜幕府の意向をうけて学ぶ＞）、衣斐蓋子『海瀕舟行図』（寛文7年兵庫西国巡見）、寛文・延宝検地。→地理的な関心が高まっている時期
- * 作製された無人島図への社会的関心のひろがり
 - 複数の写図が残る = 19世紀の佐藤信淵、渡辺崋山など？ →こちらでも検討を深めるべき

2. 地図としての「無人嶋之絵図」

- * 地図の機能と表現（利用目的にそった柔軟な変形や強調）
 - ・ 父島群島と母島群島を1紙面に収録→正確な位置関係を反映しないが、実用上問題はない
 - 伊豆七島が描かれる = 本光寺図にはない →写本間の表現の差異についても検討すべき

討論要旨

記録・要約＝菊地 智博

菊地報告・橋本コメント討論要旨

- ・報告者から、以下の補足説明がなされた。
 (杉本史子の質問に対し) 小田原海岸図には射撃場所の正確な位置について記されている、また別に残る射表(射撃の記録)と合わせて砲台の位置を定めるために作られたのではないか。
- ・コメンテータから、以下の補足説明がなされた。
 - ・(菊地智博氏の質問に対し) 江川文庫には、渡辺崋山の外国事情書草稿約10点存在する。また、鳥居耀蔵との手紙が存在する。
 - ・(ルエグ氏の質問に対し) 難船記録に海流についての記述があるかどうかは不明。難破の季節性や理由を読み取ることができないのではないか。難船記録には、難破した地元の人々による横領や、村々の間での争いについて訴訟の事例がある。こうした事例は地方の史料からは年号が判明しないが、『御用留』から時期が確定できる。
 - ・(安達裕之氏の「初島沖で発見された幕府御用瓦を積む菱垣廻船について、その際の浦証文や関連史料は葦山代官所に残っているのか」との質問に対して) 初島は当初三島代官の支配地であり、当時の史料は、地方史料を除き残されていない。

ルエグ・鈴木コメント討論要旨

- ・「無人島絵図」写本・伝来についての質問(杉本史子)について、報告者から、以下の補足説明がなされた。
 - ①『無人嶋絵図』について写本が多く存在する。
 - ②島谷市左衛門の作である最終的な証明は存在しないが、二見湾の表現などから島を実見した人物によって描かれたと考えられる点を根拠にしている。
 - ③神田の古書店で絵図と文書をワンセットとして発見し、それ以前の伝来経路は不明である。
- ・報告者から、鈴木コメントをうけて、以下の見通しが補足された。『無人嶋絵図』は大航海時代の地図文化・絵図文化の代表だと結論づけている。近世に主流となった伊能図などとは明らかに観点が異なる、さらに幕末期の測量地図は再度、「海からの地図」へと変わっていった。

関連



知識

当日の報告・コメントに対して、安達裕之氏（東京大学名誉教授）から、貴重な解説をいただきましたので、ここにその要旨を記載します。

■難船と救助

- ・寛永13年に幕府は浦々に難破船救助を命じる触を発した（日本の海難救助制度の始まり）が、その際に浦々の（管轄）代官所や村役人に難破の経緯を調べさせ証文を作成させた。これがいわゆる浦証文で、不可抗力による海難が認められれば、原則として荷損・船損として処理された。浦証文は浦々が救助義務を果たしたことの証明書でもあり、地先海面の難破船の救助が漁業権の保証にもなった。それ以前には寄船慣行により無人の漂着船に発見者の権利が生じたため、有人の難破船でも寄船と号して襲う例も珍しくなかったが、寛永13年令によってこの慣行は激減し、日本の海運は安全になった。江川家文書における浦証文の調査に期待したい。

■底質調査

- ・鈴木氏が紹介された、海底の状態を調べて船位を推定するのは、北西ヨーロッパの方法である。日本では鈴木氏の指摘のとおり『元和航海書』所載の水路誌に底質の記事があるが、この水路誌は中国に由来し、北西ヨーロッパの航海術の影響を受けている。
- ・ヨーロッパにおいて底質を調べるのは、（投錨のための海底土質を調べるためではなく）船位推定のためである。北西ヨーロッパの海は、一連の深い海盆から成る地中海と異なり、浅い大陸棚が広がり、大きな潮の干満と潮流を生じるため、潮汐と水深と底質を重視する航海が行われた。江戸時代の日本の水路誌には、水深と底質に言及がないが、測深を行った船をわずかながらも見いだせるので、案外、測深が広く行われていた可能性はある。

■長崎の中国船造船技術

- ・（17世紀、幕府の命令により、長崎の島谷市左衛門らが小笠原島を巡検した件に関連して）元禄期まで長崎来航の中国人が奉行の許可を得て、船を造ることがあり、長崎には中国船の建造技術があった。

■航海技術

- ・西洋の航海術を知っていたとしても、小笠原の緯度がわからなければ、宝の持ち腐れで、嶋谷が小笠原にたどり着けたのは幸運としか言いようがない。

研究会の案内・ニュースレター配信希望の方へ

当プロジェクトでは今後も海洋と陸地社会に関する研究会を開催します。

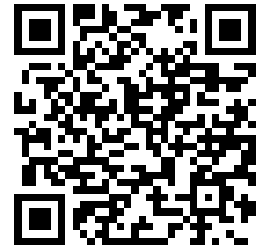
そのご案内や活動報告を、このニュースレターに掲載する予定です。

研究会の案内・ニュースレターの配信を希望される方は、

メーリングリストにご登録いたします。

下記アドレスにご連絡ください。

事務局 : mar-sato@hi.u-tokyo.ac.jp



発行

東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センター
海洋教育基盤研究プロジェクト（海洋学）
「『海洋知の再編と日本社会』の新展開」
ニュースレター 第1号

2020年9月22日

研究代表者：杉本 史子



編集後記

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行により、勤務や史料調査、会議・研究会の開催など、研究活動にも様々な影響が出ております。当プロジェクトも、コロナ禍での活動方法を模索しています。

今後ともよろしく願いいたします。

（事務局・佐藤麻里）

活動記録

7月

- 1日
プロジェクト発足
- 14日
事務局会議@ Zoom
- 21日
事務局会議@ Zoom

8月

- 18日
第1回会議@ Zoom
- 25日
事務局会議@ Zoom

9月

- 8日
事務局会議@ Zoom

今後の活動のお知らせ

第1回研究会

- ◆日時 9月22日(火) 15時～17時
- ◆方法 オンライン (Zoom)
- ◆内容
黒嶋敏氏 (東京大学史料編纂所)
「16世紀～17世紀前期の遠見と船の旗」

第2回研究会

- ◆日時 10月30日(金) 15時～17時
- ◆方法 オンライン (Zoom)
- ◆内容
後藤敦史氏 (京都橘大学)
「つながる海と防ぐ海
—幕末の大阪湾をめぐる—」(仮)

*案内をご希望の方は、事務局 (mar-sato@hi.u-tokyo.ac.jp) までご連絡ください